

る建物と関連して、溝の片側にのみ基壇縁をかねた石が配された可能性もある。溝の北側は、黒茶褐色砂質土が堆積し、その中に礫が多く捨て込まれた状況がみられたが、時期的には溝よりも後のものである。

今回検出した建物は、発掘区の制約などから極めて一部しか調査できず、その性格を明らかにすることができなかった。

95－8次は、既設水道管取り替えにともなう掘削の立会であるが、当該地は現法華寺南門前の道路であり、近世の絵図では南門両脇の築地塀に添って巨大な礎石が数個配列されていて、従来から金堂もしくは講堂がこの附近に当ると推定されてきた。そのため水道管取り替えに当っては特に南門前附近だけは機械を排して手掘りにすることを求めて立会した。掘削は以前の水道管敷設時の掘形を再度掘り直したため、生ぶな土は切れ切れに断面にしか現われない結果となったが、東西に10尺間隔で並ぶ5間分の掘立柱跡を検出した。これは中軸線で折返すと7間の建物になると推定され、法華寺講堂もしくはその前身の藤原不比等邸内の主要建築に当ると思われる。法華寺現本堂の地下でも当初の掘立柱建物を礎石建てに改作した事実があり、食堂跡と推定されている。南門附近の今後の調査が望まれる。

なお1次、5次、7次（立会）では特記すべき遺跡は検出しなかった。1次は法華寺南門推定地（4次）のすぐ南側で地形も一段下り、阿弥陀浄土院へ連なる場所であるが、奈良時代に遡る遺構はなく当時は南へ下る沼状の低湿地であったことが確認された。

VI 海竜王寺北方の発掘調査（第95－2次）

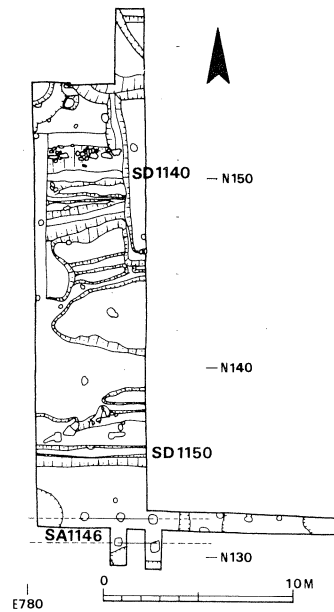
駐車場造成にともなう調査で、調査地は海竜王寺現境内の北に接する水田で、金堂の北々東に位置する。検出した遺構は築地1条と溝2条である。

築地（SA1146） 発掘区南端を東西にはしるものである。攪乱のため2間分しか確認できなかったが、基底幅は6尺、柱間寸法は6尺等間である。

溝（SD1150） 築地SA1146の北2.8mの位置を東西にはしる幅約1.6m

の素掘りの溝である。南岸は遺存状況良好であるが、北岸は削平を受けている。溝の堆積土は2層にわかれ、下層を奈良時代、上層を平安時代初期に比定できる。築地SA1146の北雨落溝と考えられる。

溝(SD1140) 溝SD1150の北15m(心々距離)の位置を東西にはしる幅1.9m、深さ1.2mの溝で、大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北壁では良く残っていたが、南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで化粧はない。瓦類、土器類、貨幣、木簡などが出土し、奈良時代に比定できる。



第8図 第95-2次発掘遺構図

この築地SA1146、東西溝SD1150はともに、現在までに確認されている平城京条坊区割のどれとも明確な関連性を示さないが、築地と東西溝のいずれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ、両者のいずれが寺域北限であるかについては決しがたく、今後の調査をまちたい。

Ⅶ 西大寺の発掘調査(第95-9次)

庫裡増築の現状変更にともない西大寺の依頼によって行なった調査である。

調査地は、現境内北門西脇で伽藍中軸線上にあり、中大門跡推定地である。発掘面積は、33㎡と小規模であったため、中大門は発見できなかったが、4条の東西溝を検出した。うち平行に走る2条の溝(北幅0.5m、南幅1.2m)は東西方向の道路の側溝である。北側溝の一部は木樋を用い、その先端はコの字形に石組した暗渠となっている。道路幅は溝心々で5.8mあり、西大寺創建以前の平城